

推定される。漁期前の資源量は前述したように 1999 年が約 33 万個、2000 年が約 12 万個であったので、漁獲率は 1/2 程度ということになる。しかし、稚ウニ調査の項でふれたように、ウニ漁が始まる 6 月以降は、漁獲対象の高齢群が急減し、ウニ漁後期の 9 月以降は非常に少なくなる (図 12)。9 月以降の産卵期に再生産に関与する高齢群の自然死亡はそれ程高いとは考えられないので、推定した資源量が過大であったと思われる。したがって、現在のシラヒゲウニの漁獲率は 1/2 よりかなり高いと考えられる。

残された問題点

現在の方法で、今婦仁漁協の漁獲量については把握できるが、他漁協で浜売りされるウニの漁獲量が不明である。今後は、これらについても調査を行って、調査海域のシラヒゲウニの利用実態をより正確に把握する必要がある。

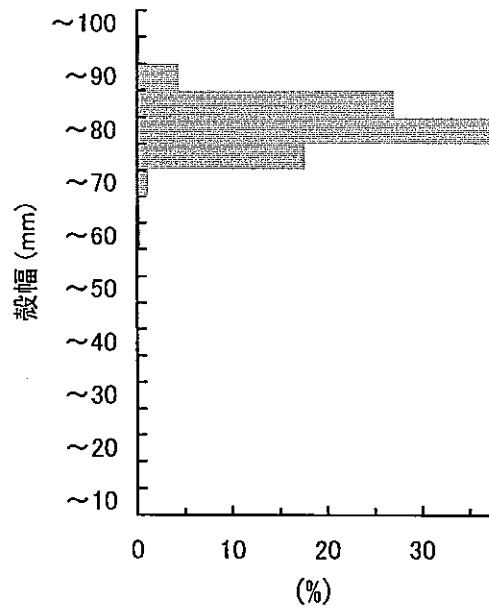


図19 シラヒゲウニの漁獲サイズ
(今婦仁漁協、2000年)

(5) 参 考 文 献

- 1) 渡辺利明, 大城信弘. 放流技術開発事業総括報告書 (定着性グループ)、平成7年度～11年度、シラヒゲウニ. 2000.
- 2) 今井利為, 新井章吾. 神奈川県毘沙門におけるアカウニのすみ場特性. 水産増殖 1994; 42:307-313.
- 3) Bernstein BB, Williams BE, Mann KH. The role of behavioral responses to predators in modifying urchins' (*Strongylocentrotus droebachiensis*) destructive grazing and seasonal foraging patterns. Mar. Biol. 1981; 63:39-49.
- 4) Meidel SK, Scheibling RE. Annual reproductive cycle of the green sea urchin, *Strongylocentrotus droebachiensis*, in differing habitats in Nova Scotia, Canada. Mar. Biol. 1998; 131:461-478.